

## 「沖縄人」にとっての戦争と戦後復興 上地 美和（文学研究科 日本学）

### 《調査趣旨》

本調査の目的は、アジア・太平洋戦争戦争末期および終戦直後、疎開にかかわる沖縄出身者の移動及び、移動にともなうコンフリクトを、実証的に明らかにすることである。そのために、大分県・熊本県・沖縄県で資料収集、聞き取り調査を行った。

### 《調査概要》

#### (1) 主な訪問地

- ①沖縄県：沖縄県公文書館、那覇市博物館、与那原町史編集室、南風原文化センター、今帰仁村歴史文化センター、沖縄県平和祈念資料館
- ②大分県：大分県立図書館、大分県公文書館
- ③熊本県：熊本市立図書館、歴史文書資料室

#### (2) 主な収集資料

- ①九州における沖縄の住民の配置・受入状況などの実態について  
⇒行政の政策にかかわる資料（『大分県報』、宮崎県「学事関係書令達通牒」など）
- ②沖縄住民受入を促すプロパガンダについて  
⇒マスコミの報道（『熊本日日新聞』など）
- ③沖縄人の戦争（疎開を含む）体験集、証言集  
⇒沖縄人が体験したコンフリクト（『南風原町沖縄戦戦災調査』など）

#### (3) 主な聞き取り調査：疎開先（受入先）におけるコンフリクトについて

沖縄県北部農村から一般疎開で大分県の農村へ行った人への聞き取り調査  
沖縄からの疎開者を受け入れた、大分県の農村での聞き取り調査

### 《成果》

上記の調査で、「沖縄人」の疎開をめぐるコンフリクトを明らかにする前提条件として、行政の対応、プロパガンダなどについては、輪郭を掴むことが出来た。

さらに、当初の計画では、①沖縄出身者のネットワークの解明、②社会活動（疎開者の支援、ならびに集住地域での諸団体の活動の実態）の解明、③同胞意識の具体的な内実と社会的役割の解明、以上の3点を明らかにする予定であった。

調査を終えて、得られた成果を、計画に即して述べたい。

#### (1) 沖縄出身者ネットワークの解明

沖縄－大阪間、沖縄－九州間といった、直線的なネットワークだけではなく、集住地域間の複雑なネットワークが浮き彫りになってきた。第一に指摘できるのが、「本土」を移動する沖縄人の存在である。第二に、集住地域間の日常生活における結びつきがあげられる。例えば、沖縄から大分に疎開したAさんは、終戦後、九州での生活経験を活かし、熊本で闇米を買い、戦前から大阪にいる親戚をたよって、大阪で販売するという、闇行商を行っていた。つまり、疎開者と戦前から「本土」とくに阪神地域に住む「沖縄人」のお互いのネットワークを活用しながら、生計を立てる「沖縄人」がいたのである。

### (2) 社会活動（疎開者の支援、ならびに集住地域での諸団体の活動の実態）の解明

1945年12月9日、東京で沖縄出身者相互の連絡と援助をはかり、民主主義による沖縄再建に貢献するために結成された沖縄人連盟は、翌年には、関西と九州にも本部を置き、さらに、支部を多数つくっていた。1945年前後の新聞の調査、ならびに熊本市での聞き取りによって、熊本市内の「沖縄人」集住地域、沖縄人連盟の支部のあった場所が明らかになった。沖縄人連盟が「疎開者」に対して行った活動実態を明らかにするための端緒を得ることができたので、今後、その活動実態を明らかにしてゆきたい。

### (3) 同胞意識の具体的な内実と社会的役割の解明

「沖縄人」という同胞意識に意味を持ってきた沖縄戦の経験が重層的であり、さらに「沖縄人」の間にもコンフリクトが存在することが確認された。例えば、「やーさん、ひーさん、しからさん」（ひもじい、寒い、寂しい）という言葉に象徴されている学童疎開は、子ども達にとっては、つらい体験であった。他方で、疎開船の沈没でなくなった学童を送りだした親が罪悪感にさいなまれたり、疎開を奨励したものが責められるなど、「沖縄人」同士の間にも葛藤（コンフリクト）が存在することとなった。終戦後も、沖縄との連絡がつかず、沖縄が戦場になったことから、疎开学童の意識は、家族の安否だけでなく、沖縄の救済、援助をすることにまで至らしめた。今後はさらに、狭義の「沖縄戦」だけではなく、広義の「沖縄戦」の実態（銃後、戦争の傷跡、それに対する人々の対応に表れた利害対立など）から、戦争の意味、そして同胞意識の実践の重層性、コンフリクトを具体的に明らかにしてゆきたい。

### 《今後の課題》

今後、さらなる資料収集を進め、それを分析することで、疎開を歴史的に位置づけてゆきたい。そのとき、今回の資料収集で、戦争末期、南洋群島にいた邦人の強制引揚と、終戦後「帝国」領土内にいた人々の引揚が、疎開と並んで『「沖縄人」の戦争と戦後復興』を明らかにするうえで不可欠の要素であることが明らかになってきた。それに関しても、これから資料収集、聞き取り調査を続けてゆきたい。

「沖縄人」の戦後復興の有り様を明らかにすることで、日本の戦後復興のあり方を、さらには「帝国の解体」にともなう生活圏の変容を、逆照射できればと考える。